

図書案内

2022年 12月号

担当 2-1 大江 2-3 梶崎



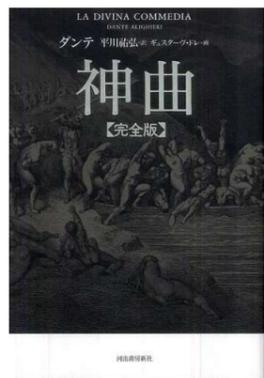
クリスマスといえば・・・？

12月のメインイベントといえばクリスマス。では、クリスマスといえば？

サンタさんのプレゼント、大切な人との時間、イルミネーション・・・確かにイベントとしてはその通り。それに加えて中部高校生は課題・模試・受験勉強・・・

しかし私たちはクリスマスの本質を見失っていないでしょうか？

クリスマスとは本来「聖キリストの生誕祭」。ということで今月号は、キリスト教に関連した本をピックアップしました。



『神曲』／ダンテ・アリギエーリ

イタリア・ルネサンス文学の代名詞。人生の道半ばで行き倒れたダンテが、ローマの詩人ヴェルギウスに出会い、生きたまま地獄・煉獄・天国を旅するファンタジー小説。行く先々で、聖書に登場する天使や魔物、歴史上の著名人や先立たれたダンテの知人など様々な相手と会話を試みてゆく・・・

日本語訳には翻訳者によって、口語も文語も存在しています。キリスト教の「死後の世界」をダンテと共に旅してみませんか。(大江)

「さあ、この下の盲目の世界へ降りるとしよう。」

聖書 がわかれば 世界 が見える 池上彰



『聖書がわかれば世界が見える』／池上彰

池上彰初の聖書解説本です。旧約聖書と新約聖書から多くの引用箇所があり、それらを用いてキリスト教のことを解説しています。この本を読むことでキリスト教がいかに世界に影響を与えているかが分かり、国際情勢についての深い理解を得ることができます。教養としておさえておきたい聖書の全貌を明らかにしながら、世界に与える影響を解説してあります。(梶崎)

真理はあなたを自由にする。

『沈黙』／遠藤周作



島原の乱以降、キリスト教が禁教となった日本に残る所謂「隠れキリシタン」の信仰を守るために日本に潜入したポルトガル人司祭セバスチャン・ロドリゴの半生を描く芥川賞作家：遠藤周作の代表作。信仰が揺らぐほどの苦悩を抱えた信徒を前にしてなぜ神は「沈黙」を保ったままであるのかというキリスト教永遠の主題の他、様々な問いを投げかけてくる。日本キリスト教文学の最高峰をこの冬、ぜひ。(大江)

もし神がいなければ、幾つも幾つもの海を横切り、この小さな不毛の島に一粒の種を持ち運んできた自分の半生は滑稽だった。



『塩狩峠』／三浦綾子



物語は、主人公の永野信夫の幼少時からキリスト教信者となり鉄道事故に巻き込まれるまでを描いている。永野信夫は父と祖母に育てられており、母は死亡したと聞かされていたが、実は生きていたことを知る。母はキリスト教を信仰していたが、祖母はそれを許そうとしなかったため、信仰を守るために母は家を出て行ったのだった。身を挺して多くの命を救った信夫の姿から、自己犠牲のあり方について考えさせられる話である。(梶崎)

おれは、自分の日常が遺言であるような、そんなたしかな生き方をすることができるだろうか。



実はキリスト教が由来の言葉



現在当たり前のように使っている言葉の中にも、キリスト教由来の言葉がたくさんあります。例えば、「狭き門」という言葉は、「狭い門から入れ、滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこから入っていく者が多い。」「命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。」というイエスの言葉が由来になっています。他にも、「豚に真珠」という言葉は、「聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついてくるであろう。」という、こちらもイエスの言葉がもとになっています。その他にも、「目から鱗が落ちる」や「カリスマ」などの言葉もキリスト教からきています。みなさんも、ぜひ色々な言葉の由来を調べてみてくださいね。(出展 <https://keaton511.com/christ-trivia/>)